

佳作

# 大すきなおじいちゃん

栃木県 栃木市立皆川城東小学校四年 江田 明日香

冒次じいちゃんが死んだ。

わたしの大すきなおじいちゃん。なみだが後から後からあふれてきて、止まらなかった。

六月の終わりに、お母さんが働いているとちの木病院に入院した。わたしは、すぐに元気になると思っていた。だから、お見まいに行ってもいつものようにわたしは笑っていたけど、じいちゃんは、つらそうに苦笑いしていた。

日を追うごとにだんだん食べ物も食べられなくなって、じいちゃんはやせてしまった。力強かった手足が今は、わたしの手や足よりも細く見えた。とても不安になった。

夏休みに入ってから、フットベースがない時は、病院に行つてじいちゃんのそばにいた。わたしと妹が行くと、

「あつちゃんともちゃんかい。」

と言つて、うれしそうに笑つてじいちゃんがいた。八月になって、じいちゃんをきぬ川の温泉につれていった。ワゴン車に車いすを乗せて。じいちゃんの足の力は、思ったより弱くなっていた。みんなでささえてやつと車いすに乗れた。と中で気持ち悪くなって、

「みんなにめいわくをかけるから帰る。」

と言い出してしまった。でもみんなが、

「めいわくだつたら連れてこないんだよ。」

とせつとくして、旅館にぶ事着く事が出来た。残念だがお風呂に入る事は出来なかった。そのかわり、温泉のお湯で体をふいてあげたらとても気持ちよさそうだった。

八月の十五日、病院から電話がかかってきた。急いで来るようにと。ドキドキしながらあわてて行くと、わたしと妹は外に出されてしまった。ドキドキが止まらない。とても心配だった。どれく

らい時間がたったのだらう。わたしと妹は部屋に入るように言われ中に入った。

「明日香だよ。わかる。」

とおばあちゃんがじいちゃんにむかつて大きな声を出したけど、返事はなかった。わたしは声をかけたかった。けれど次から次へとなみだが流れ止まらず、声がでなかった。

「じいちゃん、死なないで。」

もう大すきなじいちゃんはいない。でも心の中にいつまでも残っているよ。

「明日香、来たのが、早くあがれ。」

やさしいじいちゃんの言葉が。元気なすがたが。

